

21世紀COEプログラム 平成15年度採択拠点事業結果報告書

1. 機関の代表者 (学長)	(大学名)	聖路加看護大学	機関番号	32633
	(ふりがな<ローマ字>) (氏名)	IBE TOSHIKO 井部 俊子		

2. 大学の将来構想

理念と使命

聖路加看護大学は、キリスト教の人間愛の精神に基づく看護教育機関として87年の伝統と歴史をもつ。創立当初より、本学は、看護学の単科大学ではあるが、看護専門家の育成にとどまらず、社会性を備え、人間と社会を理解することができる看護専門職者を育成し、<人間社会の幸福と安寧を創造する科学>として看護学を発展することを使命としてきた。

世界の『全ての人々の健康』をめざす看護学国際拠点

本学は、社会に開かれた大学を基本方針とし、社会の要請に応えた新たな看護実践の発展に寄与してきた。古くは、わが国で初めての公衆衛生看護教育(1927年)を開始し、これが現在の保健師教育の源流となっている。近年では、看護実践科学の発展に寄与できる先駆的人材育成に取り組み、わが国で初めての看護学研究科博士後期課程(1988年)を設置した。1990年には、看護界で初めてWHOプライマリーヘルス看護開発協力センター(以下、WHOセンター)に任命され、世界の『全ての人々の健康(Health for All)』をめざす看護学の国際拠点となった。2002年には、看護学国際拠点として学問領域や組織体制を越えた国際学術交流を拡大するために、看護実践開発研究センターの開設に至った。看護学国際拠点として、大学院教育において国際性の涵養を図った。博士課程設置当初より、外国人客員教授による看護学研究法の強化を図るとともに、WHOセンターならびに本学の母体である米国聖公会後援会との学術交流により海外姉妹校協定(6大学)を積極的に結び、大学院生、若手教員の海外研究教育プログラムを推進するとともに、国際共同研究による博士の学位取得に貢献している。看護学研究科、WHOセンター、看護実践研究開発センターを国際教育研究基盤とし、21世紀COEプログラムの申請を行った。

学長を中心としたマネジメント体制

看護学国際拠点の発展をめざし、COEプログラムを大学の最重要教育研究活動と位置づけ、学長直轄に「COE運営委員会」を設置し、拠点リーダーのもと、各委員会の運営企画に責任をもつ副拠点リーダーを指名し、機動性を備えた組織化を行った。別に、学長直轄の委員会として「COE外部評価委員会」を設け、

拠点事業に関する質保証の機能を明確に分けて進めることとした。21世紀COEプログラム拠点に対する具体的な支援策として、国際共同研究の推進、国際研究機関との協力・連携支援を図った。また、看護実践開発実践センターにCOE支援、COE研究員室を設置するとともに、若手研究者育成のための研究助成、RAの雇用等の制度、研究環境の整備を行った。

こうした支援策をすすめるにあたり、理事長日野原重明とともに、大学付置講座等に対する寄付行為の推進を国内外において積極的に行った。本学は単科大学であり、大学の予算措置に関しては、限りある資源を効率よく、かつ有効に運用することが必須である。看護管理学の専門家である学長の強いリーダーシップのもと、本学では、経営学理論であるバランススコアシートに依拠した、大学の教育研究事業全体に関する具体的アウトカム評価を行い、適正な大学運営を図ってきた。COE推進にかかわる事業も他の事業と同様に、「財務の視点」「顧客の視点」「内部プロセスの視点」「イノベーションと学習の視点」から、大学組織全体の事業との関連を見直し、事業推進に際し、大学が有する資源を最も効率よく活用できる体制を組んでいる。

3. 達成状況及び今後の展望

<人材育成の現状と実績>

新規の看護実践開発を開拓的に推進できる能力獲得支援を目的として、若手研究者奨励研究費助成の継続を行った。併せて、COE研究員を広く募集し、優秀な若手研究員の研究プロジェクトへの参画を促した。これら若手研究者による萌芽的研究をCOE研究プロジェクトと連動し推進した。研究支援室においては、①若手研究者に対する英語教育強化プログラムを実施し、国際学術集会ならびに海外学術誌への投稿を推進した。②さらに先進的な研究法を身につけるため、海外研究拠点センターにおいて海外実地研修の推進を図った。以上の事業は、COE運営委員会、研究科、研究支援室による「研究教育共同体」において、組織的に実施した。その成果として、COE推進期間において、博士後期志願者が急増したため、学則変更を行い一学年の定員数を倍増した。学位取得者も、COE拠点形成5年間に

倍増している。更には、複数の学位取得者が、国際学術研究団体および国内主要学会から、優秀論文賞をうけている。

＜研究水準の現状と実績＞

21世紀COEプログラムでは、現代社会において医療が早急に解決の糸口を必要とする健康問題に焦点を当て、＜先進医療と看護＞＜病との共生と看護＞＜社会構造のひずみと看護＞＜市民主導型看護サービス方略開発＞の4つの重点研究領域15研究プロジェクトにより、①市民主導型の健康生成を促進する看護理論構築と実用化、②市民健康生成情報の集積、相互交流を目的としたInternet Community Technology開発、③市民参画型研究を推進できる看護実践開発研究者育成。過去3年間では、研究論文257件、実用化および特許出願3件、国際会議（主催6件、招聘講演6件）などの実績をあげた。

＜今後の展望＞

COE 拠点事業終了後の国際的教育研究拠点としての発展と継続性を担保するために、大学として以下のことを計画し、推進している。

- (1) ポストCOE拠点を構築するために、新規プロジェクト運営会議を組織化し、事業機関の実績を基盤に、グローバルCOEプログラム、大学院教育改革プログラム等、大型外部資金の獲得を組織的に支援する。資金の補充については、理事会における資金支援体制の強化を検討している。
- (2) 知的財産戦略も含めた研究支援体制を強化するために、産学連携担当の顧問の採用を検討中である。
- (3) 「看護実践研究開発センター」「発明委員会」「新規プロジェクト運営会議」と各拠点との連携を強化し、産学官連携や起業等による外部資金獲得に向けた新たなイノベーション戦略をすすめる。
- (4) 国際共同研究推進体制を強化するために、国際交流室をさらに組織強化する。
- (5) 聖路加国際病院、聖路加ライフサンエンス財団との教育研究連携を強化し、3つの連合組織連携による＜国際連携研究戦略ユニット＞等の構想をすすめる。
- (6) 21世紀COEプログラム「市民主導型健康生成をめざす看護形成拠点」の実績は、本邦の医療改革のグランドデザインに資するものであり、政策、マスメディア、経済界への知見の提言、普及、協働を図る。

こうした新たな取り組みのすべてに学長を中心としたマネジメント体制が汲まなく関わる。

6. 拠点形成の目的

1) 必要性・目的

豊かさの水面下に広がる生活環境の劣化や現代社会構造のひずみから生じる健康問題は、ますます多様化・複雑化してきた。社会情勢や個々人の生活、価値観が絡まる健康問題解決の鍵は、人々がいかに自分の健康に関心を寄せ、自ら健康を守り創っていくかにかかっているといえる。また、高齢化社会が加速的に進み、誰もが現行の医療システムに大きなひずみを感じている今日、健康問題を抱えつつ生活している人に質の高い医療が均等に配分され、社会に生きる人々全体の健康レベルを高めていく新しい医療の新機軸を提示することが急務とされている。

「看護」は、市民が行き方の選択を迫られたとき、傍らにたち選択を支援する実践科学である。すなわち、「看護」は、市民が自ら健康を創り、より良く生き、安らかな死を迎えるために必要な市民のパートナーとしての機能を有する。聖路加看護大学21世紀COEプログラムでは、市民ひとりひとりの固有のライフスタイル「生きてきた経験」を活かし、市民が主体となる健康生成社会の実現と、新しい医療のあり方を市民とのパートナーシップと協働を核に創りだす「市民主導型の健康生成をめざす看護形成拠点」をめざす。

本拠点は、学長の強力なリーダーシップのもと、聖路加看護大学における大学院看護学研究科、看護実践開発研究センター、WHOプライマリーヘルスケア看護開発協力センター（以下、WHOセンターとする）との組織的連携を基盤に運営する。学長直轄に、拠点リーダー、COE運営委員会をおき、研究プロジェクト間の有機的な連携・統括を行う。また、市民団体、経済界、行政の代表、国際的研究者による、国内および国際外部評価委員会を設置し、拠点の継続的評価、改革方針について審議し、国際研究組織としての推進力を高める。併せて、未来健康社会促進のためにリーダーシップを発揮できる若手研究者の教育・輩出をめざす。

2) 具体的目標

①市民主導型の健康生成論の構築、②健康生成論に基づく看護実践モデルの開発と実用化、③市民健康生成情報の集積、相互交流を目的としたInternet Community Technology開発と普及、④市民が生きてきた経験や知恵に基づいて必要な医療を選択し、自分の潜在力を医療資源として役立てる主体的な医療への参画を可能にする「ヘルスコミュニティ」の形成と評価、⑤ 以上の研究教育活動の過程において若手研究

者が有為な人材として、また国際的競争力を備えた新看護実践科学のリーダーとして輩出できる国際的教育研究拠点を形成する。

7. 研究実施計画

1) 研究組織

本拠点では、市民消費者中心の健康生成論を基盤とし、看護学を核に、社会学、情報学、心理学などを融合した、新機軸の看護実践科学を創成する。そのために、研究計画・実施・評価の全過程において市民が参加し、パートナーシップ（対等な立場に基づく協働）によって推進する市民参加型研究（community-based participatory research）を基盤に各研究プロジェクトを推進する。現代社会において、市民の視点から早急に解決の糸口を必要とする健康問題に焦点を当て、〈先進医療と看護〉〈病との共生と看護〉〈社会構造のひずみと看護〉〈市民主導型看護サービス方略開発〉の4研究分野、15研究プロジェクトを組織化し、研究を推進する。

市民参加型研究を推進するために、現有の看護実践開発研究センターを発展・強化し、市民参加型研究支援および健康生成情報メディアシステム開発支援を目的としたCOE研究支援室を設置する。さらに、各研究プロジェクト間の相互作用・相乗効果の発現し、健康生成論構築とその実用化を推進するために、COE運営委員会のもとにCOE部門会を組織化する。

2) 研究計画

(1) 市民主導型の健康生成論の構築

〈先進医療と看護〉〈病との共生と看護〉〈社会構造のひずみと看護〉の各研究分野において、市民参加型研究を推進し、そのプロセスアウトカムを集積し、次のようなステップを踏み概念化を図る。①概念化ワーキンググループにより「市民主導の健康生成」の主要概念を抽出する、②「市民主導の健康生成」を促進する看護実践活動がどのように展開されているのか、③どのようなアウトカムが個人、集団、コミュニケーションのレベルで生じているのか、について継続比較分析を行い、理論構築をはかる。国際駅伝シンポジウム等により、市民主導の健康生成論の国際的研究者ならびに市民代表者による評価を集積し、理論洗練を図る。

(2) 市民主導型の健康生成論に基づく看護実践モデルの開発と実用化

市民主導型の健康生成論に基づき、各研究分野における健康課題に焦点化した、看護実践モデルを開発し、

実践適用、実用化をめざす。〈先進医療と看護〉分野では、遺伝子検査、不妊治療など、先進医療の中で意思決定過程にある人々の葛藤を解明し、理解と納得を支える意思決定支援モデル等の開発と実用化をめざす。〈病との共生と看護〉分野では、良質な健康情報が格差なく人々に行き届き、慢性的な病であっても充実した生き方につながる資源やコミュニケーション連鎖を生成するセルフケアモデル等の開発と実用化をめざす。〈社会構造のひずみと看護〉分野では、病をもつ高齢者、性暴力被害をうけている女性など、社会的健康弱者の苦悩や孤立を解明する。さらに、社会に潜在する力(人材育成や地域力など)や資源(医療費や医療政策など)により、健康弱者といわれる人々が健やかさと信頼を生み出すための、社会基盤形成や社会関係資本を生成する方法論構築をめざす。

(3) 市民健康生成情報の集積、相互交流を目的としたInternet Community Technology開発

健康生成情報をコンテンツ化して集積し、それらを相互交流できるInternet Community Technologyを開発する。この情報システムは、市民がWeb上でいつでもアクセスでき、親しみやすい情報交流機能と使いやすさを併せ持つ総合的なサイト「看護ネット」として構築する。この情報システムでは、利用者が、健康関連情報基本的能力としての機能的ヘルスリテラシーを獲得するという、受け身の能力促進ではなく、社会的スキルを含め、さまざまなコミュニケーションによって情報を積極的に獲得できる能力や、さらに批判的に情報を分析・吟味して、社会的、経済的、政治的な健康の決定要因を変化させる活動に参加できる能力の開発をめざす。

(4) 主体的な医療への参画を可能にする「ヘルスコミュニティ」の形成と評価

大学が核となり、コミュニティの文化力を市民消費者中心の健康生成につなげる教育研究協働体を形成する。具体的には、社会関係資本により人が動き、グループが動き、地域社会が動き発展することにより、多くの人々が望むであろう、「多世代交流型ケアによるヘルスコミュニティ」や住み慣れた「家で死ぬるまちづくり」の形成をめざす。そのために、地域との協働をはかり、市民健康相談ボランティアや在宅ホスピスボランティア教育プログラムを開発し、市民によるボランティア活動の組織化を図る。また、高齢者が最期のときを住みなれたまちで、安心して過ごすことができるよう、多世代交流型ケアモデルを創設し、世代間交流や日本文化の継承が展開できる場の生成を試み

る。これらの協働活動のプロセスアウトカムを、個人、集団、コミュニティのレベルから評価し、組織的ケアの持続性可能性を検討する。

8. 教育実施計画

1) 市民主導の健康生成を担う国際的人材を継続的に輩出する「研究教育共同体」の形成

本拠点では、新しい看護実践科学創成の一翼を担えるよう看護研究と看護実践を融合して推進でき、市民との協働により未来健康社会を形成することに寄与できる国際的人材の養成に主眼を置く。これらは、COE運営委員会、研究科、研究支援室による「研究教育共同体」において、組織的に実施する。この共同体において、人材育成総合計画を立案し、実施、評価を行う。具体的には、〔研究・教育基盤体制〕〔看護実践開発体制〕〔国際交流推進体制〕の強化を図り、①海外姉妹校との相互交流システムによるノマンディック教育(国際性の醸成と先進的研究法の獲得)推進、②COE若手研究者助成金制度による自発的研究活動支援、③看護実践開発センターにおける研究・教育支援(情報検索コンサルテーション、EBNIに基づく研究法のコンサルテーション等)、④各プロジェクトへの協働参画による研究交流(有能な若手研究者の独創性涵養)を行う。

2) COE研究プロジェクトにおける萌芽的研究推進支援

COE研究プロジェクトと連動し、関連する研究領域において自己の研究テーマを位置づけ、萌芽的研究を推進できるよう、大学院博士後期課程在学学生を対象に自発的研究活動助成を行う。研究助成を受けた学生は、関連するCOE研究プロジェクトの事業推進担当者の指導のもとに、関連研究プロジェクトに積極的に参加することで、自分の研究テーマが焦点化されるとともに、プロジェクト推進への相乗効果を得る。

3) 国際的実践開発研究能力の支援

看護実践開発研究センターでは、学生が継続的に研究能力と実践能力をブラッシュアップできるよう、専門家による支援体制を整える。研究を推進する上で欠くことのできない文献情報検索について、常時情報検索の専門家にコンサルテーションができるシステムを整え、また、研究倫理や英語文献講読に関するセミナーを定期的開催する。さらに、国際感覚の醸成を促し、先進的な研究法を演習するノマンディック教育の推進を試みる。姉妹校のオレゴンヘルスサイエンス大学およびカリフォルニア大学サンフランシスコ校

において、研究方法論に関する実地教育をうけるための支援体制を構築する。

9. 研究教育拠点形成活動実績

①目的の達成状況

1) 世界最高水準の研究教育拠点形成計画全体の目的達成度

本拠点の推進により、「市民主導型の健康生成」は、生老病死の体験から備わる暗黙知を市民との協働研究により効率的にフィードバックさせ、プロダクト（医療・ケア）に活かすことにより、限りある医療資源を効率的に循環するヘルスコミュニティを形成することとして理論化でき、その実証がすすめられた。この実践理論開発は、医療における「プロダクト・アウト」から「マーケット・イン」へのパラダイムシフトをおこす、大きなエポックとなった。これらの成果は、世界的レベルでの国際協働研究に発展した。市民主導のがん看護（People-centered cancer care）をめざし、本学が拠点となり、東アジアがん看護ネットワークを形成し、5カ国との研究連携がすすんでいる。また、本学WHOセンターのグローバルネットワークの協働強化により国際協働研究プロジェクトが多様に行われ、若手研究者・大学院生を相互派遣する研究教育体制の整備がすすんだ。したがって、目標達成度は、想定以上の成果をあげたといえる。

2) 人材育成面での成果と拠点形成への寄与

新規の看護実践開発を開拓的に推進できる能力獲得支援を目的として、若手研究者奨励研究費助成の継続を行った。併せて、COE研究員を広く募集し、優秀な若手研究員の研究プロジェクトへの参画を促した。これら若手研究者による萌芽的研究をCOE研究プロジェクトと連動し推進した。研究支援室においては、①若手研究者に対する英語教育強化プログラムを実施し、国際学術集会ならびに海外学術誌への投稿を推進した。②さらに先進的な研究法を身につけるため、海外研究拠点センターにおいて海外実地研修の推進を図った。以上の事業は、COE運営委員会、研究科、研究支援室による「研究教育共同体」において、組織的に実施した。その成果として、COE推進期間において、博士後期志願者が急増したため、学則変更を行い一学年の定員数を倍増した。学位取得者も、COE拠点形成5年間に於いて倍増している。更には、複数の学位取得者が、国際学術研究団体および国内主要学会から、優秀論文賞をうけている。

3) 研究活動面での新たな分野の創成や、学術的知見等

(1) 市民主導型の健康生成論の構築

市民主導型の健康生成論は、「People-centered care」として概念化した。＜医療者、当事者、市民とのパートナーシップ＞が医療資源、医療情報の理解・熟慮、意思決定や行動変容の促進につながることで、＜パートナーシップによる健康資源・能力開発＞がコミュニティに役立つ健康生成のノウハウや仕組みを生み出す、というプロセスが明らかになった。そして、自分が所属している社会はケアしあう社会であるという信頼、コミュニティ意識に結びつき、＜健康生成のための社会関係資本の強化拡大＞へと至るプロセスとして構造化できた。これらの概念は、医療崩壊危機に対する健康政策のグランドデザインに資することが可能と考える。また、「ヘルス・コミュニケーション論」「ケア関係社会資本論」など新健康科学分野の創出が期待できる。

(2) 健康生成論に基づく看護実践モデルの開発と実用化

＜先進医療と看護＞分野では、遺伝子検査、不妊治療など、先進医療に対する意思決定過程を支援するケアガイドを開発した。このケアガイドは、葛藤や不安の軽減に寄与することが実証され、標準化したケアガイドおよびアセスメントツールをWeb上から広く配信している。集団やコミュニティ向けの集団アプローチへの応用へ展開している。＜病との共生と看護＞分野では、がん患者－医療者情報共有ツール、慢性病をもつ高齢者の遠隔看護システムなどを開発した。これにより、複雑な医療システム、医療とは隔離されがちな在宅環境においても、ケアの主人公として情報・知識、心配事などについてWeb上で効果的に医療者とやり取りが可能となる。これにより、ケア満足度、QOLの向上が検証され、場や時を越えてケアを拡大する、「看護情報システム論」を発展できた。

(3) 市民健康生成情報の集積、相互交流を目的としたInternet Community Technology開発

「看護ネット」<http://www.kango-net.jp/>を構築した。市民のヘルスリテラシー向上のみならず、エンパワメントとアドボカシー機能をもつバーチャルコミュニティ形成が興っている。

(4) 「ヘルスコミュニティ」の形成と評価

＜社会構造のひずみと看護＞分野において、「家で死ぬるまちづくり」を推進した。都内C区、S区で、在宅ホスピスボランティア育成プログラム、市民・医療施設・行政・産業・教育の連携・協働体を核にした、

ヘルスコミュニティ形成が着実にすすんでいる。

4) 事業推進担当者相互の有機的連携

COE運営委員会の下部組織として、概念化委員会を設け、研究プロジェクトの枠を超えて、事業推進者、COE研究員、大学院生を集結し、概念化ワーキンググループを形成した。この基幹プロジェクトを立ち上げたことにより、市民主導型の健康生成に共通する主要要素について、横断的なデータ収集と分析が可能になり、概念化を円滑に推進することにつながった。概念化の過程で焦点化した課題やテーマをたすきにとし、研究プロジェクト間で検討することを目的にした国際駅伝シンポジウムを7回開催した。このシンポジウムは、市民にも公開し、市民代表者による外部評価委員からの評価をうけた。市民の要請や評価は、研究者間では煮詰まっていた知見の解明や新たな方法論の開発へのサーチライトとなった。

5) 国際競争力ある大学づくりへの貢献度

本学WHOセンターのグローバルネットワークから、COE拠点活動が発信されたことを受け、アジア諸国より、博士後期課程への海外留学生受け入れの要請が複数おこった。そのため、国際交流部門を新設するとともに、看護学研究科において外国人留学生規定を設け、平成19年度にインドネシアよりの博士後期課程入学生の入学試験を実施するに至った。一方、本学大学院生は、COEプログラムによる若手研究者奨励研究助成を受け、海外姉妹校等における短期留学や共同研究を行い、国際協働研究による成果により学位を取得したものが複数あった。これらの研究は、国内学会より優秀論文賞を獲得につながっている。さらに、COE事業推進者に加わった若手研究者（有森直子准教授）は、COEによる日本型遺伝看護の研究実績に対し、国際遺伝看護連盟（ISONG）より、Founder's AWARD, 20th Annual The International Society of Nursing in Genetics, 2007を受賞した。

6) 国内外に向けた情報発信

国際的には、本学WHOセンターのグローバルネットワークを介し、全世界にむけ、市民主導の健康生成に関する、研究成果、概念化のプロセス、健康情報コンテンツ、看護ケアプログラム、看護ケア用品等について、電子媒体および英語版報告書により、広く発信した。併せて、各研究プロジェクトのためにコンテンツ化し発信するしくみとして「看護ネット」を構築した。この健康情報サイトは、市民に親しみやすいインターフェイスを持った健康情報総合サイトとして構築し、情報発信のみならず、相互交流、評価が可能で

あり、即時性をもって、研究成果の波及効果を得、活動に生かすことにつながった。看護ネットは、英語版、Kids版を併設しており、国際的、多世代的な情報発信の推進に資することができた。

7) 拠点形成費等補助金の使途について（拠点形成のため効果的に使用されたか）

補助金の配分は、事業推進担当者で構成するCOE運営委員会を設置し、各研究プロジェクトを横断する基幹研究事業（看護ネット開発・運用費、健康生成論の概念化、若手研究者の萌芽的研究活動支援）の推進に重点を置く基本方針のもとに実行した。市民の健康情報生成コンテンツの集積、相互交流のために、看護ネットを開発した。看護ネットへの利用者のアクセスは、2万5千件/月であり、健康生成に資する良質のPortal siteとして、社会的に広く認知され、高く評価をうけている。

各研究プロジェクトの事業推進に協働できる有能な若手研究者に研究助成を行う意図から、COE研究員を学内外問わず、一定基準を設けて公募し、「聖路加看護大学21世紀COE研究員取扱要項」に従って、選定、採用した。併せて、博士後期課程の大学院生、博士研究員（PD）に対し、萌芽的研究のための奨励研究費を公募するとともに、RAとして、COE研究プロジェクトの活動に参画し、経済面の安定を保証するとともに、研究基盤能力を高める機会を与えた。以上の若手研究者の支援事業により、COE開始前5年間平均に比して、博士後期課程入学者が倍増し、博士課程の定員を増加することにつながった。

②今後の展望

本拠点の主要な成果は、(1) 市民主導型の健康生成論を「People-centered care」として概念化し、(2) これまで社会構造のひずみや先進医療の背後で、医療から取り残されがちな人々の健康課題を当事者の視点にたって解決する看護実践モデル開発へ結び付け、(3) 健康課題をもつ当事者、その周囲の人々が、医療者とのパートナーシップにより、情報や知識を活用し、理解や納得を得て、行動力を増す、といった能力開発に結びつくことが実証されたことである。さらに、(4) 健康生成のための能力拡大は、自分だけのために用いられるのではなく、「家で死ぬるまちづくり」や「多世代交流型ケアによるヘルスコミュニティ」の形成過程で実証された、組織力の生成（社会関係資本の生成と循環）につながることがみだされた。

これらの重要な知見は、近年、医療崩壊の危機を迎えている本邦の医療改革にとって、具体的で実践理論

と方略を与えるものである。個々人のレベルのパートナーシップが核となり、同じ関心や課題をもつひとひとが健康課題の解決へむけて知恵や技を分かち合い、コミュニティレベルでの健康を可能にするような協働意識や社会的サポートを生成し、さらに多くの支持と共感による世論を形成し、健康社会を実現する地域力へと変換していくことが示唆される。

今後は、各研究プロジェクト間の共同研究体制を強化するとともに、さらに、医療経済学、医療政策論、医療倫理学など、医療社会学分野との学際的研究を展開し、健康課題解決に対して、組織力の生成（社会関係資本の生成と循環）を核とした組織的ケアアプローチが社会において相乗効果や循環性、持続性を生成する過程を長期追跡研究していかねばならない。例えば、東京都中央区等のいくつかの地域において、「女性たちが守り育む乳がんにつよい中央区」などの健康コミュニティの形成を実証する課題があげられる。本拠点における、〈乳がん体験者のサポートグループ〉〈不妊女性のケアコミュニティ〉〈多世代型高齢者ケアコミュニティ〉〈5歳児の子と親のからだを知ろうキャラバン〉など、多様な健康生成コミュニティで能力開発した女性達が、医療従事者、一般市民、行政、その他、多様な専門職者との協働過程で、乳がん予防に資する資源や知識、つながりといった、社会関係資本の相乗効果を生み出し、女性の生き方を反映した乳がん予防システムを構築することも、重要な研究課題といえる。これら、健康社会づくりを主とする研究成果の応用は、地域やコミュニティにおいて地理的、文化的、経済的特性を活かした組織的ケアを次々と生み出す可能性を有し、その波及効果は大きく、がん以外の国民病に対するケアとしても発展でき、社会的意義も大きいと考える。

③その他（世界的な研究教育拠点の形成が学内外に与えた影響度）

健康生成のノウハウや仕組み、人的資源を市民との協働によりプロダクト（医療・ケア）に活かすことにより、限りある医療資源を効率的に循環する、医療の「プロダクト・アウト」から「マーケット・イン」へのパラダイムシフトは、学内外の大きな変革要因となった。

学内では、平成19年度に、看護学研究科において看護専門職者以外の博士後期課程入学者の受け入れを決定し、学則の改定に至った。看護情報学、看護心理学、看護社会学、看護統計学などの新設コースに、看護学

以外の幅広い専門分野の人材を募集し、異分野間で教育研究を共有することで、従来の医療者中心の視点から市民主導型の健康生成へとケア学的転回を生み出す人材育成をさらにすすめる。市民主導の健康生成をめざす看護形成拠点は、海外の看護学博士後期課程を有する大学院にも大きなインパクトを与えた。本学のWHOセンターから発信した「市民主導の健康生成：People-centered care」の学術的有用性が認められ、平成19年International Network for Doctoral Education in Nursing (INDEN)を本学看護学研究科の主幹により、世界各国90名の博士課程教員の参加を得て開催するに至った。参加大学院と本拠点との間で、「People-centered care」の世界的発信・展開をめざす、国際研究教育ネットワークのひとつとして〈東アジアがん看護ネットワーク〉が立ち上がり、国際協働研究を推進へと発展している。これらは、本拠点が世界をリードする国際的看護学教育研究拠点あることを示すものである。

21世紀COEプログラム 平成15年度採択拠点事業結果報告書

機 関 名	聖路加看護大学	拠点番号	F31
-------	---------	------	-----

拠点の名称	市民主導型の健康生成をめざす看護形成拠点
-------	----------------------

1. 研究活動実績

この拠点形成計画に関連した主な発表論文名・著書名【公表】

- ・事業推進担当者（拠点リーダーを含む）が事業実施期間中に既に発表したこの拠点形成計画に関連した主な論文等〔著書、公刊論文、学術雑誌、その他当該プログラムにおいて公刊したもの〕
 - ・本拠点形成計画の成果で、ディスカッション・ペーパー、Web等の形式で公開されているものなど速報性のあるもの
- 著者名（全員）、論文名、著書名、学会誌名、巻(号)、最初と最後の頁、発表年（西暦）の順に記入
 波下線（~~~~~）：拠点からコピーが提出されている論文
 下線（_____）：拠点を形成する専攻等に所属し、拠点の研究活動に参加している博士課程後期学生

- * Shigeko Horiuchi, Yukari Yaju, Yaeko Kataoka, Hiromi Grace Eto, Naoko Matsumoto, Development of an evidence-based domestic violence guideline: Supporting perinatal women-centred care in Japan, Midwifery, 17 (2007), doi:10.1016/j.midw.2007.01.012 PMID: 17300864
- * Yaeko Kataoka, Yukari Yaju, Hiromi Eto, Naoko Matsumoto, Shigeko Horiuchi, Screening of domestic violence against women in the perinatal setting: A systematic review, Japan Journal of Nursing Science (2004) 1, 77-86, 2004
- * Shigeko Horiuchi, Yaeko Kataoka, Hiromi Eto, Michiko Oguro, Taeko Mori, The applicability of women-centered care: Two case studies of capacity-building for maternal health through international collaboration, Japan Journal of Nursing Science, 143-150, 2006
- * Kyoko Nishihara, Shigeko Horiuchi, Hiromi Eto, Sunao Uchida, Makoto Honda, Delta and theta power spectra of night sleep EEG and higher in breast-feeding mothers than in non-pregnant women, Neuroscience Letters, doi:10.1016/j.neulet.2004.07.021
- * Yana Gepshtein, Shigeko Horiuchi, Hiromi Eto, Independent Japanese midwives: A qualitative study of their practice and beliefs, Japan Journal of Nursing Science, 85-93, 2007
- * 高橋恵子、菱沼典子、石川道子、吉川菜穂子、松本直子、鈴木久美、金澤淳子、内田千佳子、印東桂子、三森寧子、看護大学が市民に提供する健康相談サービスの利用状況と課題、聖路加看護学会誌 Vol.11 No.1 90-99, 2007
- * Naoko Okubo, Michiko Hishinuma, Keiko Takahashi, Chikako Uchida, Michiko Ishikawa, Naoko Matsumoto, Kumi Suzuki, Evaluation of Health Education Program for Active Citizens, 聖路加看護大学紀要 No.34 55-61, 2008
- * 菱沼典子、川越博美、松本直子、新幡智子、石川道子、看護大学から市民への健康情報の提供、聖路加看護大学紀要 No.31 46-50, 2005
- * 大久保暢子、松谷美和子、田代順子、岩辺京子、今井敏子、後藤桂子、菱沼典子、佐居由美、白木和夫、中山久子、有森直子、森明子、石本亜希子、瀬戸山陽子、三森寧子、印東桂子、村松純子、山崎好美、幼稚園・保育園年長地向けのプログラム“自分のからだを知ろう”に対する評価指標の検討、聖路加看護大学紀要、No.34, 36-45, 2008
- * 菱沼典子、松谷美和子、田代順子、横山美樹、中山久子、佐居由美、山崎好美、白木和夫、岩辺京子、有森直子、今井敏子、島田多佳子、木村千恵子、中川有加、西田みゆき、鈴木加代子、臺有桂、村松純子、亀井智子、森明子、瀬戸山陽子、相澤身江子、5歳児向けの「自分のからだを知ろう」プログラムの作製、聖路加看護大学紀要、No.32 51-58, 2006
- * 谷口好美、医療施設で認知症高齢者に看護を行ううえで生じる看護師の困難の構造、日本老年看護学会誌 Vol.11 No.1 12-20, 2006
- * Tomoko Kamei, Nobuaki Kamei, Sumio Murase, Development and Cost Effectiveness of a Telenursing System for Home Oxygen Therapy Patients and an Educational Program for Telenurses, Journal of eHealth Technology and Application Vol.5, No.3, 304-308, 2007
- * 川上千春、亀井智子、梶井文子、山田艶子、杉本知子、石山稔、矢吹和重、森田俊秀、武田恵美子、中浜好枝、渡邊敏子、作田幸子、三田村文江、牛久芳枝、菊池憲子、認知症になっても安心して暮らせる街づくり、聖路加看護大学紀要 No.33 103-110, 2007
- * 亀井智子、梶井文子、山田艶子、川上千春、久代和加子、杉本知子、大蔵倫博、小坂井留美、新野直明、都市部に居住する高齢者のための転倒骨折予防アウトリーチプログラムの実践、聖路加看護大学紀要 No.33 74-84, 2007
- * 亀井智子、慢性呼吸不全・在宅酸素療法実施者に求められる新たな看護、聖路加看護学会誌 Vol.11 No.1, 143-145, 2007
- * 亀井智子、亀井延明、高橋正光、在宅酸素療法実施者の長期療養管理を目的とした遠隔看護支援システムの開発と利用効果、日本遠隔医療学会雑誌 2巻1号 20-26, 2006
- * 長谷川真澄、亀井智子、急性期高齢患者のせん妄発生の予測に関する看護師のアセスメント構造、聖路加看護学会誌 Vol.10 No.1, 1-10, 2006
- * 外崎明子、わが国の造血細胞移植後患者のヘルスプロモーションにおける看護支援の展望、日本がん看護学会誌17巻2号 4-12, 2003
- * 外崎明子、造血細胞移植を受ける患者の下肢筋力と主観的健康観、聖路加看護大学紀要 No.30 10-17, 2004
- * 外崎明子、佐藤正美、今泉郷子、小泉佳右、高橋恵子、ワークショップ：がんサバイバーのための身体活力の回復をめざすプログラムの開発、日本がん看護学会誌21巻、2号 68-72, 2007
- * 外崎明子、佐藤正美、今泉郷子、小泉佳右、がんサバイバーへの運動プログラムの開発を目的としたJohns Hopkins大学Mock教授との研究交流および骨髄移植病棟での研修報告、聖路加看護大学紀要 No.33, 116-123, 2007
- * Tonosaki, A, Lower leg muscle strength and fatigue in patients receiving hematopoietic cell transplantation up to two months after hospital discharge, Biology of Blood and Marrow Transplantation, Vol.14 No.2, 423, 2008
- * 酒井昌子、宮崎紀枝、麻原きよみ、鈴木良美、安齋ひとみ、加藤典子、有本梓、大森純子、梅田麻希、小野若菜子、小林真朝：Community-Based Participatory Researchに関する文献レビュー、看護研究、第39巻2号、121-134, 2006.
- * Noel J Chrisman（講演）、麻原きよみ、鈴木久美（監訳）：CBPRとは何か？、看護研究、第39巻2号、3-10, 2006.
- * Noel J Chrisman（講演）、鈴木久美、麻原きよみ（監訳）：CBPRの実際、看護研究、第39巻2号、11-17, 2006.
- * 麻原きよみ：日本の地域看護実践へ向けたCBPRの適用と課題、看護研究、第39巻2号、19-22, 2006.
- * 小松浩子、小陽美紀、麻原きよみ、鈴木久美、有森直子、Noel J Chrisman：看護職と患者・家族・市民が研究を協働するために、看護研究、第39巻2号、33-40, 2006.

- * 森明子、浜崎京子、まさのあつこ、あなたらしい不妊治療のために カウンセラーと経験者からのメッセージ .保健同人社 .2007
- * 森明子、不妊治療初期の女性に対するストレスマネジメント・サポートプログラムの開発と評価 .日本生殖看護学会誌 .4(1) : 4-15 .2007
- * 森明子、有森直子、桃井雅子、堀内成子、福田紀子、ストレスを軽減するケアプログラムへの不妊治療早期の女性のニーズ フォーカスグループインタビュー法を用いて .日本不妊看護学会誌 .2(1):12-19 .2005
- * 森明子、清水清美、川元美里、桃井雅子、永森久美子、英国の不妊当事者サポートにおける生殖看護師と自助グループの協働 .聖路加看護大学紀要 .第34号 .2008. 62-69.
- * 森明子、自助グループと看護職の協働 全国行脚の試み .臨床看護 .33(6) .2007 . 885-887 .
- * 小黒道子・堀内成子、ミャンマー連邦農村の母子保健向上をめざす人材育成プログラムの開発、聖路加看護学会誌 Vol.10 No.1 46-53, 2006
- * 山崎好美、梶井文子、田代順子、鈴木良美、菱沼典子、堀内成子、平林優子、酒井昌子、有森直子、林直子、江藤宏美、佐居由美、林亜希子、看護における人材育成(教育)の国際協力・協働に関する文献レビュー、聖路加看護学会誌 Vol.11 No.1 38-44, 2007
- * 林直子、田代順子、菱沼典子、有森直子、平林優子、平野かよ子、国際看護コラボレーターに必要な能力モデル構築と教育プログラムの開発、国際保健医療 23巻1号、23-31,2008
- * 土屋円香、小黒道子、江藤宏美、大隅香、堀内成子、ミャンマー連邦農村の母子保健向上をめざす人材育成プログラムのプロセス評価、聖路加看護学会誌 Vol.11 No.1, 83-89, 2007
- * Satomi Ono, Yuko Hirabayashi, Ikuko Oikawa, Yukiko Manabe, Preparation of a Picture Book to Support Parents and Autonomy In Preschool Children Facing Day Surgery, Pediatric Nursing Vol.34 No.1 82-83, 88, 2008
- * 小野智美、日帰り手術に向けての幼児の自律性を親と協働して支援する看護介入プログラムの開発 第1報、日本看護科学会誌 27巻1号 3-13, 2007
- * 小野智美、日帰り手術に向けての幼児の自律性を親と協働して支援する看護介入プログラムの開発 第2報、日本看護科学会誌 27巻4号 3-13, 2007
- * 平林優子、及川郁子、小野智美、眞鍋裕紀子、石井由美、岩辺京子、吉川久美子、大島千絵子、金子須美子、子どもの健康にかかわる保健・看護・保育・教育・栄養管理職の感じる問題、聖路加看護学会誌、Vol.11 No.1 125-132, 2007
- * 鈴木千衣、横山由美、及川郁子、平林優子、田村佳士枝、川口千鶴、小原美江、石井由美、慢性・長期的健康問題をもつ子どもと家族の日常生活と社会資源の活用、福島県立医科大学看護学部紀要 7号 13-24, 2005
- * Hiroko Komatsu, Mid-term report on St. Luke's College of Nursing's 21st century Center of Excellence Program:Core elements and specific goals of people-centered care, Japan Journal of Nursing Science 3, 71-76, 2006
- * Hiroko Komatsu, Empowerment and Harmony in Cancer Nursing, 日がん看会誌 21巻2号 87-91, 2007
- * Naoko Hayashi, Hiroko Komatsu, Yoshiko Sakai, Noriko Iba, Akiko Tonosaki, Kazuko Katagiri, Perceived difficulties and coping as predictors of adaptation among cancer nurses, Japan Journal of Nursing Science 3, 131-141, 2006
- * 矢ヶ崎香、小松浩子、外来で治療を続ける再発乳がん患者が安定した自分へ統合していく体験、日がん看会誌 21巻1号 57-64, 2007
- * Hiromi Eto, William L. Holzemer, Nursing Dissertations in Japan, 1993-2006: State of the Art, Japan Journal of Nursing Science, 4(1), 1-10, 2007
- * 梅田麻希、山崎好美、梶井文子、堀内成子、平野かよ子、熱田泉、江藤宏美、佐居由美、市川和可子、林亜希子、田代順子、開発途上国における地域看護力強化のための人材育成協力、聖路加看護大学紀要, 33, 31-38, 2007
- * 中山和弘、「看護情報学」としての消費者健康情報学へのアプローチの試み、看護教育、48巻1号、65-69, 2007
- * 豊増佳子、中山和弘、e-learningを実施している米国の看護系大学院の実態調査、聖路加看護大学紀要、No.30 104-114, 2004
- * 亀井智子、梶井文子、杉本知子、菱沼典子、中山和弘、豊増佳子、青木則明、web法と郵送法調査にもとづく看護継続教育におけるe-learning受講ニーズ構造の比較研究、聖路加看護大学紀要、No.32 1-10, 2005
- * 中山和弘、eラーニングの今後の方向性と可能性、保健医療科学 Vol.54 No.3 187-193, 2005
- * 大久保暢子、亀井智子、梶井文子、堀内成子、菱沼典子、豊増佳子、中山和弘、柳井晴夫、看護職者のe-learning受講希望に関する因子の特定とその構造

国際会議等の開催状況【公表】

(事業実施期間中に開催した主な国際会議等の開催時期・場所、会議等の名称、参加人数(うち外国人参加者数)、主な招待講演者(3名程度))

聖路加看護大学21世紀COEプログラムキックオフ国際シンポジウム

場所：聖路加看護大学アリス・C・セントジョンメモリアルホール

開催時期：2004年1月23日

会議名：St. Luke's College of Nursing 21st Century COE International Symposium
People Centered Health Promotion: Collaboration of people and nurses

参加人数：約220名(外国人参加者 7名)

主な招待講演者：Dr. Rita Cartey (ジョージメイソン大学看護学部健康科学名誉学部長)

Dr. Bevery McElmurry (イリノイ大学シカゴ校看護学部副学部長、WHO看護開発協力センター長)

Dr. William Holzemer (カリフォルニア大学サンフランシスコ校看護学部副学長、WHO看護開発協力センター長)

国際駅伝シンポジウム

開催目的：「市民が主人公となる医療」をメインテーマに、各研究プロジェクトが有機的に連携して、関連する健康課題に焦点化したテーマについて、海外研究者および市民代表者を招聘し、討論を行い、国際発信を行う。

場所：聖路加看護大学アリス・C・セントジョンメモリアルホール

第1回(2004.7.17)：「家で死ねるまちづくり」

第2回(2004.10.3)：「考えよう！医療と看護 あなたも医療チームの一員 - 」

第3回(2004.11.21)：「自分で決めた生き方を実践するために」

第4回(2005.10.29)：「私たちが選ぶ時代に向けて：患者中心の乳がんチーム医療」

第5回(2005.11.27)：「知恵と勇気と経験をわかちあう：社会の中で支えあう女性たち」

第6回(2006.9.30)：「『認知症になっても安心して暮らせる街づくり』 - できることから始めよう！ 都市部における認知症介護 - 」

第7回(2006.10.28)：「子どもと学ぼう、からだのしくみ - あまはどれくらいからだを知っていますか？ - 」

参加人数(第1回～第7回通算) 約1200名(外国人参加者 15名)

主な招待講演者：Dr. Alan Kelihar (東京大学アメリカ太平洋地域研究センター客員教授)

Dr. Mary B. Foley (カリフォルニア大学サンフランシスコ校看護研究開発センター副所長)

Dr. Annette O' Connor (オタワ大学教授、オタワ・ヘルスリサーチ・インスティテュート所長)

Ms. Joyce Neumann (MD. Anderson Cancer Center, Oncology Nurse Practitioner)

Dr. Ueno Naoto (MD. Anderson Cancer Center, Associate Professor)

Dr. Dr. Barbara Perfitt (グラスゴー・カレドニアン大学教授)

Dr. Noel Chrisman (ワシントン大学看護学部教授) 他

3. 国際ワークショップ

開催目的：People-Centered Careの概念化等、市民主導型の健康生成を推進するための研究方略、理論構築に関する国際的研究者によるワークショップを行う。

場所：聖路加看護大学302,301教室

第1回(2006.10.27)：People-Centered Careの概念化

第2回(2008.2.21)：People-Centered Careの概念化と評価

参加人数(1-2回通算)：約80名(外国人参加者 4名)

主な招待講演者：Dr. Noel Chrisman (ワシントン大学看護学部教授)

その他：1. Strengthening Community Health Nursing in Developing: Action and Evaluation Research

1) 2005.11.26: 海外助言者3名 (Dr. William Holzemer, Dr. Barbara Perfitt, Dr. Richard Garfield)

海外協働研究者 (Anna Kruger (Kenya)) 概算 60名

2) 2006.10.14日: 海外助言者2名 (Dr. Barbara Perfitt, Dr. Caroline White)

海外協働研究者 3名 (Dr. Shirin Aqua Zarif & Mr. Shamsulrahim Rahim from Afghanistan, and Dr. Anna Kruger from Kenya) 概算 50名

3) 2007年 10月8日(土) 海外助言者3名 (Dr. William Holzemer, Dr. Barbara Perfitt, Dr. Caroline White)

海外協働研究者 4名 (Mr. Shamsulrahim Rahim, Mr. Mohammad Isaq, from Afghanistan; Dr. Jasmin Amarsi, Ms. faujirya Ali from Pakistan) 海外協働研究者2名 概算 50名

2. 地域における世代間交流と高齢者ケア -日米の事例から 2007.10.13

参加人数 約100名 海外講演者 ケースウエスタンリザーヴ大学 Dr. ピーターホワイトハウス

3. 日米認知症ケアセミナー 2007.8.27-9.2 参加人数 参加人数 約50名 海外講演者 16名

2. 教育活動実績【公表】

博士課程等若手研究者の人材育成プログラムなど特色ある教育取組等についての、各取組の対象（選抜するものであればその方法を含む）、実施時期、具体的内容

本学では、博士課程等若手研究者の人材育成プログラムの特色ある教育取組として、優秀な若手研究者を確保し、かつ優れた若手研究者（以下、研究者）が自由な発想で研究活動を行うことを目的に、本拠点の事業実施期間である平成15年度から19年度までの5年間「21世紀COEプログラム奨励研究費」（以下、奨励研究費）の研究助成を行った。各項目については、以下のとおりである。

【対象】

1) 研究拠点を形成する研究科等で研究を行う大学院博士後期課程在学者または、看護実践開発研究センター所属の博士研究員等であること。2) 世界的な研究拠点を形成するために必要かつ優秀な者であること。3) 他からの類似的の助成を受けていないこと。4) 日本学術振興会特別研究員でないこと。5) 大学が特に認める者。

【選抜方法】

21世紀COE運営委員会の委員によって構成される21世紀COE奨励研究費選定委員会を設置し、次にあげる審査基準を重視し、指導教員を審査委員から外すなど厳正かつ公正な審査、選抜を行った。1) 世界的な研究拠点を形成するために、プログラムの推進に寄与できる見込みのある研究計画を持つ者であって、学術の将来を担う優れた研究者となることが十分に期待できる者であること。2) 研究計画が具体的であり、本プログラム遂行に必要な研究活動を行う能力を有する者であること。

審査項目としては、1) 目的の明確性、適切性、2) 方法の適切性、妥当性、3) COEへの貢献度、4) 経費の適切性、5) 他の助成金への申請状況等も考慮事項として評価項目にいった。

【実施時期】

- 1) 募集時期：前年度3月（電子メール、学内掲示、平成16年度からは、「看護ネット」により募集）
- 2) 提出書類：研究計画調書
- 3) 交付内定：4月（交付申請書の提出は、5月）
- 4) 研究期間：4月～12月（実績報告書の提出は、翌年3月締切）

【具体的内容】

本プログラムは、博士後期課程修了者のほとんどが大学教員として研究を継続していくため、今後申請すると思われる文部科学省科学研究費補助金（以下、科研費）を見据えて、その教育的意味も含めての研究計画とした。

研究者が関連する領域に自己の研究テーマを位置づけて各研究プロジェクトに参画できるよう配慮し、研究を推進するとともに、研究のプロセスを学ぶ機会も設けた。採用者数は、各年度8名程度（平成16年は、19名）とし、1人当たりの支給金額の上限を100万円/年とした。また、研究者支援として、看護実践開発研究センターでは、図書館司書による情報検索についての個人相談はもちろんのこと、年間を通して少人数のガイダンスを計画的に実施した。その他、英文校閲に関する相談には、2名のネイティブの教授が指導にあたった。そして、昨今各研究機関、研究者が対応を迫られている研究費（競争的資金）の取扱いについては、科研費事務を担当している事務職員が、大学の科研費の取扱いに準じた手引きを作成、説明会を行い、研究者の求めに応じて相談、指導を行った。

この他、奨励研究費以外にも、質の高い看護サービスの創出のために欠かすことのできない専門家による研究倫理、英語文献理解、知的財産のセミナー、海外招聘講師による講演会やワークショップが開催された。

【人材育成の具体的実績】

本プログラムの開始された平成15年度からの5年間の課程博士学位取得者（以下、学位取得者）は、31名であり、本プログラム開始前の15年間の学位取得者が30名のことを考えると格段に増加している。5年間で29名の学生に支援を行ったが、そのうち学位取得者は19名65%、計画書審査に合格して候補者になったもの6名21%で、3年間助成をうけた学生6名は、ほとんどが学位取得につながった。このことから、奨励研究費が人材育成に大きな成果を挙げたことがわかる。

【各年度の奨励研究費に関する一覧表】

年度	採択件数(件)	合計金額(千円)
平成15年度	9	3,736,200
平成16年度	19	4,557,780
平成17年度	8	4,880,809
平成18年度	7	5,011,000
平成19年度	9	6,981,639

21世紀COEプログラム委員会における事後評価結果

(総括評価)

設定された目的は十分達成された

(コメント)

拠点形成計画全体については、大学として組織的に取り組み、市民との協働とパートナーシップにより多様な健康生成コミュニティを形成し、人材を育成したことは将来の活動につながる重要な成果であり、評価できる。

人材育成面については、若手研究者奨励研究費助成、英語教育強化、海外の研究拠点での実地研修、国際共同研究環境の整備などを計画的に行い、研究能力とともに国際性のある看護研究者を育成し、特に、市民参画型研究を推進できる看護実践開発研究者を育成したことはユニークであり、本拠点の今後の活動を担う有力な人材となると思われる。

研究活動面については、健康課題をもつ当事者とその周囲の人々が医療者とのパートナーシップによる活動を行うことにより、情報や知識を得て行動力を増すことを実証したことは、今後の本拠点の活動の展望を示す価値ある成果であると評価できる。「市民主導型」の意味はいまだ必ずしも明確になっていないが、協働の経験を重ね、吟味していく過程で、概念化されていくことが期待できる。

補助事業終了後の持続的展開については、今回得られた成果を基盤とし、大学として今後も計画的・組織的に取り組む具体策が示されており、十分期待できる。